



慶應義塾大学名誉教授 西岡秀雄君
平成二十三年八月一日逝去
享年九十七

追想 西岡秀雄君

——新しい思考を求め続けた大先輩

井口悦男 (慶應義塾大学名誉教諭)

西岡さんと話せる機会は、いつも、今度はなにで啓発されるか楽しみであった。国の内外の話題であれ、民俗的なオモチャの見方であれ、世界のトイレ事情であれ、坦々と話され尽くさないうちに、目の醒める思いが高まり、淀みがちな当方の思考に、積極的な活力を呼び起こす不思議な話術を貯えられている方であった。さり気なく後輩を元気にさせる先輩であり続けられた。

技術系のお家育ちで、合理的客観的視野を広げられ、大正初期生まれ史学科同級三羽鳥の一人として学究の道を歩まれた。第二次大戦下には学卒将校として外地も踏まれ、その折ご当人の話として、ベトナムの空港で、土器片散布に思わず腰をかがめ採集されていたのを、士官学校出の上官が見て、周囲の部下に「航空学専攻の西岡士官を見習え。空港の障害物を率先して自ら除去活動されるとは」。その上官に大学での専攻を聞かれ「考古学であります」と答えたのだがネト。

師の卓越した整理力に圧倒されたのは、昭和十四年であったと思うが、日米学生会議交歓時の記念アルバムを拝見した時、その部厚さの上に、船旅に始まる数々の記念品を、ハワイでのパイナップルの上紙をはじめ、キッチンと貼り込まれ、それぞれコメント付きなものにはただただ感嘆するばかり。その上に、田園調布のお宅の増築部分、ワンルールの書斎は、三方柵作りで「本は一年に一・五m分必要」と言われて、これもびっくり。一隅に旋

盤が鎮座していた。その広間で、奥様をまじえ、学生の集いが重ねられた。フォークダンスの「山の娘ロザリア」講習会で、この冷房なし練習は忘れられない。

地球の「寒暖七〇〇年周期説」は、西岡さんの金字塔のひとつとして、海外で不動の評価を得られている。その実証補足に、京都現存古社寺建造物の詳細な方位調査に、ある夏お供したことがあり、精密な分度器を発案されていた。豊中の奥様の里での朝食に出された「いちじく」の味は格別で、いま自分の夏の定番に組み込まれている。西岡さんの発案で、学友数人と借りた自転車で、舗装の少なかった当時の旧東海道中心の道路調査を実施し、思わぬ見聞を得られたが、詳細な報告は、師のアルバムの例に従った。その後も学生との自転車旅行を重ねられる一方、タイのチュラロンコン大学に出講されたり、マチュピチュ遺蹟を先導されたり、福澤先生の交詢社の新版BRB開設に助言されたり。

一定年後、大田区立郷土博物館館長を永く務められ、玩具の民俗地理学的視野からのユニークな発想を、莫大な蒐集をもとに続けられた。一方、早くから環境問題としてのトイレ改良に力を込められた。それにしても、学生と一緒に気を配られ続けた奥様に先立たれたことは、大きな痛手と、共に薫陶を受けた敬友佐藤仁威氏と、ご夫妻の冥福を祈りつつ、幅広い活動に思いを馳せる。